

住工混在地域における 住民の景観認識に関する研究 —埼玉県八潮市を対象として—

1X16D044-1 齋雪乃*

戦後の急激な人口増加、それに伴う住宅需要増加や工場等の産業施設の開発のためスプロール化によって、現在多くの都市で様々な要素が混ざり合い雑然とした景観が存在している。そのような地域は都市としてのアイデンティティを見出しづらい状況にあるといえる。本研究では住工混在地域の一例である埼玉県八潮市を対象として、住民がどのような要素に着目し、愛着を抱いているかについてアンケート調査した結果、住民の好きな場所には八潮特有の文化や風土との結びつきが強く、反対に八潮らしい場所には好きな場所に影響の大きかった個人の経験や心理的作用との結びつきは弱いことが示唆された。

Key words: 住工混在地域, 八潮市, 地域景観認識, アンケート

1. 研究の背景と目的

1.1 研究背景

都市において、そこでのこれまでの歴史や文化が現在の景観に現れ出ている。戦後、1950年代から1970年代ごろに日本の人口は急激に増加し、高度経済成長期の最中にあつた。工業や商業の発展に伴い経済面の成長が著しかったが、その反対に急激な変化に対応しきれず、都市計画における土地利用の課題としてスプロール現象が発生した。その一因として首都圏整備計画があげられる。首都圏整備第一次基本計画(1958年)では大ロンドン計画を参考に、3つの政策区域が指定された。東京都特別区を中心とした既成市街地、既成市街地の無秩序な膨張発展を抑制するための緑地地帯としての近郊地帯(グリーンベルト)、既成市街地の人口を誘導するために工業都市として整備することを目的とした市街地開発区域である。ここで近郊地帯(グリーンベルト)では、計画の基礎となった首都圏整備法(1956年)には法的規制力がほとんどなかったことや、当時の農耕意欲の減少、行政指導の限界などから農地転用や無秩序な市街化が進み、近郊地帯は廃止され、第二次(1968年)では近郊整備地帯として再編された¹⁾。これらの経緯をもつ地域の現在の景観は、農地や住宅地、工場が混在する雑然としたものであり、地域のアイデンティティを失っているように見受けられる。そのような背景を持つ都市の現在の景観は、農地や住宅地、工場が混在する雑然としたものである。本研究で扱う埼玉県八潮市についても同様の都市と捉えられる。

トマス・ジーバーツは人口の増加や鉄道、自動車、エレクトロニクスによって郊外の田園に向かって拡張し続ける都市の形を「都市化された田園地域」、「田園化された都市地域」とし、それらを「Zwischenstadt」(間にある都市)と名付け、都市と田舎の双方の性格を持ち合わせている都市を

指している。現在では世界各国で「間にある都市」が見受けられるが、それらの都市の特徴として工業化以前からそれぞれの地域が持っていた都市的伝統とは何の関係もないという点であると指摘している²⁾。

以上のような性格を持つ都市では、日常的に住民が居住地の景観を意識する機会をもつことは難しく、様々な地域で人々が生活を営むための合理性を求めた多種多様な景観が生まれている。つまり、その都市のアイデンティティを失っている状態であるとも言える。

1.2 研究の目的

住工混在地域において住民が捉えている各地域の好きな場所とそれらに付随する想起を抽出し、住民が市の景観をどのように認識しているかを把握することを目的とし、住民が抱く各地域の景観認識から八潮市の愛着形成につながるアイデンティティとなりうる景観づくりはどのようなものであるか考察していく。

2. 研究の概要

2.1 既往研究の整理

本研究に関連する研究として、景観認識把握のための手法は多く存在し、(1)埼玉県八潮市に関する研究、(2)住民の地域認識のメカニズムに関する研究、(3)地域認識把握に関する研究、がある。

(1) 埼玉県八潮市に関する研究

森信ら³⁾は、埼玉県八潮市を対象に、過去の文献資料における住民の生活行事や地形から景観構成要素を抽出したのち、住民の日常的な生活における景観認識の把握を目的に地図指摘法と自由記述を組み合わせたアンケートを行い、それらを比較している。その結果として、生活史的価値を有する要素や地形的特徴を持つ要素は住民の日常的な景観

認識には必ずしも影響を及ぼしていないことを明らかにしている、また、中川ら¹¹⁾は、埼玉県における首都圏整備計画について首都圏整備第一次基本計画で近郊地帯と指定されていたはずの八潮市や草加市に、工業都市としての市街地開発区域の工業団地の規模をしのぐ大規模工業団地が造成されたことが近郊地帯の工業化を助長したことを指摘している。

(2) 住民の地域認識のメカニズムに関する研究

吉村¹²⁾は原風景の生成プロセスに関して、幼少期にそれぞれの場所や時、状況の体験により原風景の素材となるものが自動化や身体化を繰り返して無意識のうちに蓄積されていき、生活でのなんらかの変化により、それらがひとつの場のまとまり、経験のまとまりとして束ねられ、自覚し、現在の自分と対照することで原風景が生成されると同時に自己のアイデンティティも保全されるというメカニズムを示している。また、尾野¹³⁾らは、これまでの風景論や佐々木¹⁴⁾の地域景観認識モデルを踏まえて、環境のイメージの認識プロセスの「経験・記憶」の段階に注目し、書籍を用いてテキストマイニングの新たな手法を試みている。

(3) 地域認識把握に関する研究

(a) アンケートやアンケート中のテキスト分析から地域認識を評価した研究

斎藤ら¹⁵⁾の研究では、好感度と豊かさを軸にそれぞれ5段階で評価する都市の総合評価、23項目の形容詞対を用意しそれらを5段階尺度ではかるイメージ評価、95項目の構成地物を設定し、地域のイメージに重要と思われるものを制限想起法によって5項目選択する方法を用いた景観資源評価、属性に関する項目を設定したアンケートを実施している。西名ら¹⁶⁾の研究では、住居から大学までの道のりを図示し、好ましい景観と好ましくない景観について理由を述べてもらい、それらのテキストを「主な対象」「判断につながる理由」「対象の状態」の3つに分類し、分析を行っている。

(b) インタビュー調査やヒアリング調査、ワークショップから

地域認識を評価した研究

加藤¹⁷⁾の研究では高齢者を対象に自宅訪問し、近隣環境の地図を見せながら、よく行く場所や昔よく行った場所、思い入れのある場所について選択時期や頻度、同伴者の有無、行動内容などをインタビューにより聞き取っている。

渡部ら¹⁸⁾の研究では当該地区に20年以上居住しているものを対象にグループインタビューによって「なじみのある」「なつかしい」「誇らしい」「地域らしい」という形容詞から連想される景観、それらに関連する思い出や経験、知識を自由に語ってもらうことで地域アイデンティティとして強く認識する景観構成要素の特性を解明しているものも見受けられる。また、添田ら¹⁹⁾の研究では、地形図から地形と土地利用の変化を読み取り表現した構造層地図と市勢要覧に掲載された場所および住民によるワークショップで抽出された場所を表現した意味層地図を重ね、今まで見えなかったものを可視化することで、町の構造と意味を

様々な視点から比較・考察している。

(c) 写真やスケッチを用いて地域認識を評価した研究

上山ら²⁰⁾の研究では市のなかで「まちとして魅力を感じる場所」というテーマで被験者一人当たり10枚程度の写真を撮影してもらい、その中から任意で5枚選択してもらった後に、5枚について撮影場所、撮影対象、撮影理由について自由に口述してもらって写真投影法を用いている。

古賀ら²¹⁾の研究では、まちを自由に歩き「いいないやだな」と思う景観を撮影してもらい、その場所を地図上に記録し必要に応じてメモをとり、撮影した写真に「要素」「特徴」「印象」の3点についてキャプション(タイトルや説明)をつけてもらい、写真とキャプションを1つの書式にまとめた景観カードを作成してもらってキャプション評価表が用いられている。上田²²⁾の研究では写真ではなく、スケッチを被験者に書いてもらう風景イメージスケッチを取り入れている。

(d) 景観認識における研究手法をまとめた研究

西村²³⁾の研究では地域認識を抽出する際に用いられる手法とそれに対応して得られる認識の特性がまとめられている。認識とは思考と知識によってなりたつものであるとしており、認知科学(認知言語学)の考え方を空間認知に取り入れた研究²⁴⁾や記憶や経験を用いた地域認識の把握手法の研究²⁵⁾を取り上げている。(1),(2),(3)で示した既存研究は西村の研究の参考文献となっているもので、西村はこれらをまとめ、表1.1のようにタイプ別に表している。また、抽出方法に関して、表1.2のように表している。

表 1.1 景観認識の抽出方法¹⁴⁾

	抽出方法	媒体
a	アンケート	記述
b	インタビュー	発話
c	現場実験	行為
d	文献調査	資料

表 1.2 景観認識の抽出手法¹⁴⁾

1	半構造化質問	5	ワークショップ	9	イメージマップ法
2	構造化質問	6	追跡調査	10	連想法
3	写真投影法	7	スケッチ	11	文献調査
4	地点識別法	8	圏域図示法		

2.2 本研究の位置付け

地域の景観認識について、視覚的に把握できる景観構成要素や地形的な側面から分析した研究を中心に数多くなされているが、それらの中でも捉えどころがなく、特徴的な景観資源を有していない地域において視覚的に把握できる要素にとどまらず、その背後に含まれている住民一人一人が持つ行為や眺めの記憶まで内包し、地域の景観認識把握を試みる点に本研究の特徴があるといえる。

3. 対象地の概要

3.1 八潮市の概要

八潮市は埼玉県南東部に位置し、人口 89702 人、面積 18.02 km²、世帯数 41542 世帯である(2018.5.1 時点)¹⁵⁾。八潮市の東部の境界に沿って中川(一級河川)、西部の境界に

沿って綾瀬川（中川支流）、市内中央部を葛西用水、八条用水が南北に通っている。八潮市はもともと八潮市北部の八條村、西部の八幡村、東部の潮止村の3つの村で構成されており、1956年に三村合併が、1959年に工場誘致条例、1972年に市制施行により八潮市成立し、1985年には首都高速6号三郷線開通、1992年には高速外環状道路開通、2005年にはつくばエクスプレス線が開通している¹⁷⁾。八潮市の河川等の位置と都市計画用途地域を図3.1に示す。

3.2 八潮市の土地利用変化

八潮市は昔から水に恵まれていたため、農業や舟運業、漁業が盛んに行われていた。時代別の土地利用の変化について表3.1に示す。1956年には田や畑といった農地がほとんどの面積を占めていたが、ゆるやかに都市化が進み、2009年には農地は大きく減少し宅地面積が大きな割合を占めるようになった。また用途不明の土地も大きな割合を占めるようになっている。

表 3.1 地目別面積の比較(1956年, 2009年)¹⁷⁾ (%)

	田	畑	宅地	雑種地	池沼・山林	原野	その他
1956年	63.69	26.79	8.47	0.36	0.22	0.47	0
2009年	4.28	8.66	42.28	13.78	0.07	0	32.9

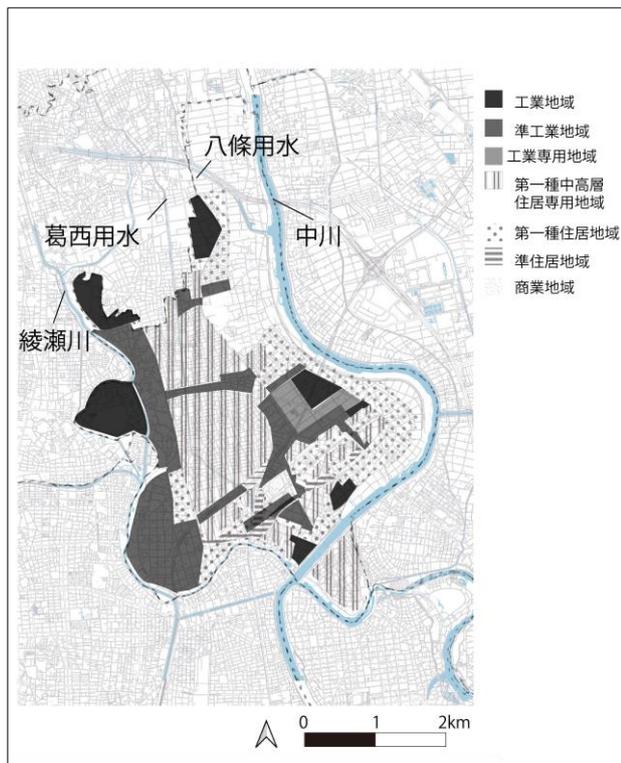


図 3.1 埼玉県八潮市の都市計画図¹⁸⁾より著者作成

3.3 八潮市におけるまちづくり活動

八潮市では2017年に八潮市市街化調整区域まちづくり基本方針作成にあたり、区域内の住民の意向把握のためのアンケート調査、ワークショップを行っている。

アンケート調査では、今後の居住意向について、「今の場所に住み続けたい」という住民の割合が49.0%、「別の場所に引っ越したい」という住民の割合が36.0%となり、居住意向のある住民の割合が高い結果となっている。

今後の市街化調整区域のまちづくりにおいての重要度に関しては生活基盤施設の維持向上や買い物などの居住に関する利便性向上の重要度が高いとされている。

また、ワークショップでは市街化調整区域の中でもさらに3地域に分け、それぞれの地域の「良いところ」、「悪いところ」を話し合い、地図上にまとめ、地域の将来像や改善方法について検討している。

市街化調整区域のまちづくりの課題として土地利用に関しては、資材置き場や駐車場、未耕作地によって雑然とした景観が見られることに対し、土地利用の規制や周辺の農業環境、既存集落との調和が目標として挙げられている。景観に関しては、河川沿いの不法投棄等に対して良好な河川環境の保全に向けて適切な土地の維持管理が目標として挙げられている¹⁹⁾。

3.4 八潮市における土地区画整理事業

八潮市の市街化調整区域は市全体の約27%（約495ha）が指定されており、過去に土地区画整理事業は行われておらず、農地の保全が目標に掲げられてきたが、現在では農地等の自然的土地利用が51.0%、住宅用地や商業用地等の都市的土地利用が49.0%となっている。また、都市的土地利用の中で8.5%を占める「その他の空地」の内訳として駐車場が9.4ha（35.6%）、資材置き場が6.3ha（24.0%）を占めており、自然的土地利用の割合は減少傾向にある²⁰⁾。

2005年のつくばエクスプレス線開通まで八潮市には鉄道駅がなかったため、稲荷伊草地区では隣接する草加市の草加駅に近いことから民間ディベロッパーによる無秩序な宅地開発が行われたことや大瀬古新田地区では隣接する葛飾区の亀有・金町方面への利便性が良いことから小規模な宅地開発が盛んに行われスプロール化が進んだことが土地区画整理事業の背景として挙げられている。また、八潮市の西部を流れる綾瀬川周辺の西袋柳之宮地区は準工業地域に指定されているが、住宅立地の進行のために住工混在化が進み、環境が悪化したという背景がある²⁰⁾。

これらに加え、八潮市南部地区では2005年のつくばエクスプレス線の開通に伴い、1996年5月10日に八潮市南部土地区画整理事業の都市計画決定がなされており、大規模マンションの建設や駅前広場の整備などにより新規居住者が多く見られ、現在でも計画が進行中である。またこれらは国土交通省関東地方整備局の市街地整備の代表事例の一つとなっているつくばエクスプレス沿線の土地区画整理事業に含まれている。これまでの八潮市における土地区画

整理事業図を図 3.2 に示し、土地区画整理事業年代を表 3.2 に示す。

表 3.2 からわかるように稲荷伊草第二地区の土地区画整理事業終了から大瀬古新田、西袋柳之宮、八潮南部土地区画整理事業開始には時間の間隔が見られ八潮市内でも地区によって存在する景観は大きく異なる。

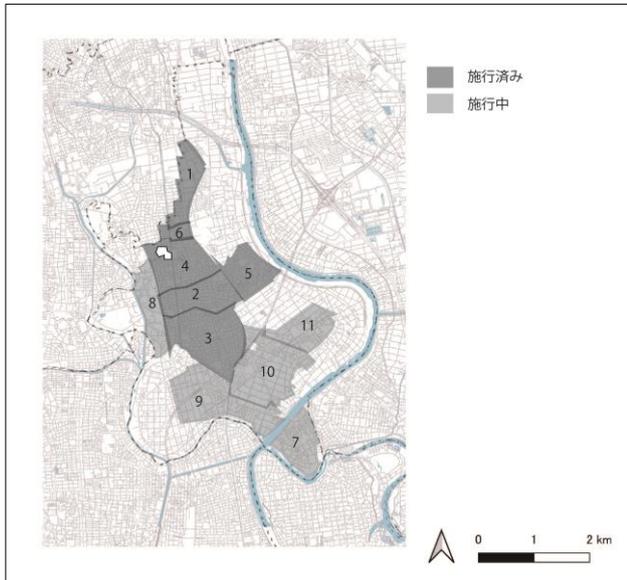


図 3.2 八潮市土地区画整理事業図²⁰より著者作成

表 3.2 八潮市土地区画整理事業概要²⁰

	事業名(土地区画整理事業)	施行主体	期間(年)	面積(ha)	備考
1.	草加八潮工業開発	県	1965-1968	39.8	施行済み
2.	八潮第一	市	1971-1983	64.9	施行済み
3.	八潮第二	市	1974-1986	118.7	施行済み
4.	稲荷伊草第一	市	1978-1990	76.8	施行済み
5.	鶴ヶ管根二丁目	市	1982-1989	50.2	施行済み
6.	稲荷伊草第二	市	1983-1991	18.1	施行済み
7.	大瀬古新田	市	1997-	52.2	施工中
8.	西袋柳之宮	市	1997-	54.4	施工中
9.	八潮市南部西一体型特定	市	1997-	88.1	施工中
10.	八潮市南部中央一体型特定	県	1997-	99.1	施工中
11.	八潮市南部東一体型特定	都市基盤整備公団	1997-	72.1	施工中

3.5 八潮市における景観づくり

八潮市では平成 17 年に「八潮市みんなで景観まちづくり条例(平成 23 年 10 月より「八潮市みんなで作る美しいまちづくり条例」に移行)」が施行され、平成 18 年 4 月に条例に基づき、「八潮市景観まちづくり基本計画」が策定されている。基本計画では八潮市の景観特性を「中川水系に育まれた歴史の営みが原風景であったが、東京の縁辺化による特徴のない郊外型風景が広がり、水を背景とした自

然的景観要素と、外部要因を背景として形成された都市的景観要素が混在し、特徴の見えにくい景観となっている」と指摘し、「現在の曖昧な景観を、市民・事業者・市が共有できる目標を設定するとともに、具体的な方針を示すことにより、誇りと愛着もてる「ふるさと」へと市民参画により導くことが課題」と記されている²¹⁾。

4. アンケート調査の概要

4.1 対象地域

アンケート配布にあたり 3 地域を設定した。3 章の資料から、これまで住民に認識されやすいとされている要素を含み、1970 年代頃に土地区画整理事業を完了し、現在では旧市街地となっている中央 3 丁目、また 2015 年に地名変更がなされ現在、土地区画整理事業進行中であり、駅周辺の新市街地に近い大瀬 5 丁目、これまでに土地区画整理事業は行われておらず、都市計画用途地域が第一種中高層住居専用地域と工業地域が混在し、地域の要素が認識されにくい大字伊勢野である。各地域の基本情報を以下の表 4.1 に示す。

表 4.1 アンケート配布地の基本情報

	中央 3 丁目	大瀬 5 丁目	大字伊勢野
面積(ha)	14.7	13.2	35.7
世帯数	568	448	1735
人口(人)	1226	646	4233
用途地域	第一種中高層住居専用地域	準工業地域	第一種中高層住居専用地域 / 工業地域
農地率(%)	0.17	12	7.0
空地率(%)	0.18	0.34	5.1

4.2 アンケート調査の目的

アンケートでは住工混在地域において、住民がどのような要素から地域をどのように捉えているか、またどのような場所をどのような理由からポジティブに感じているかを把握する。

4.3 アンケート調査の概要

アンケート調査の概要について以下の表 4.2 に示す。

表 4.2 アンケート調査の概要

配布日時	2019 年 12 月 23, 24, 25 日			
配布方法	ポスティング			
回収方法	郵送			
配布地域	中央 3 丁目	大瀬 5 丁目	大字伊勢野	計
配布数(部)	210	160	630	1000
回収数(部)	5(2.4%)	5(3.1%)	23(3.7%)	33(3.3%)

4.4 アンケート項目

アンケート項目は以下のように設定した。

- (1) 性別, 年齢, 居住年数
- (2) 家から駅までの道のりの手書き地図を目印になるものや気付いた事と共に描いてもらう。
- (3) 駅に行く頻度, 目的, 交通手段
- (4) 日常生活の中で, 八潮市内で好きだな, ホットする, 居心地がいいと思う場所を 10 個挙げてもらう。
- (5) (4) で答えた中から特に大切な場所を 3 つ, 理由と共に挙げてもらう。
- (6) 八潮以外の人に対して八潮らしい場所を紹介するとしたら, どの場所を選ぶか理由と共に挙げてもらう。

八潮市内には鉄道駅が八潮駅 1 つのみであり, 配布地域では八潮駅を利用する人が多いことを予想し, 家から駅までの道のりを書いてもらい, 普段どのような要素に着目して地域を捉えているかを KJ 法で把握した後に, 八潮市内での好きな場所を 10 個, またその中でも特に大切だと思う場所を 3 個挙げてもらい, テキストの意味内容から分類し, どのような場所が住民に求められているかについて考察を試みる。最後の項目では, 個人の好きな場所と八潮らしい場所がどのように重複するかをみるために設定した。

5. アンケート調査の結果

5.1 アンケート結果

回答者は全体として男性が 19 名, 女性が 14 名であり, 年齢に関しては 40 代から 60 代の回答者が多く, 居住歴に関しては 11-15 年の回答者が多い。属性に関する結果を表 5.1, 5.2 に示す。

表 5.1 アンケートの属性結果(年齢)

	性別		年齢(歳)										全体	
	男性	女性	0-9	10-19	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80~			
中央3丁目(5)	4	1				1	1			2	1			5
大瀬5丁目(5)	3	2			2				2	1				5
伊勢野(23)	12	11		2	1	3	7	3	5	2				23
全体(33)	19	14		2	4	4	7	7	7	2	0			33

表 5.2 アンケートの属性結果(居住歴)

	居住歴(年)													
	0-5	6-10	11-15	16-20	21-25	26-30	31-35	36-40	41-45	46-50	51-55	56-60	61-65	66-70
中央3丁目(5)			1	1		2								
大瀬5丁目(5)	3	1					1							
伊勢野(23)	3	3	8	1				3	1	2	1			
全体(33)	6	5	9	1	1	2	1	3	1	2	1			1

駅までの道のりについて頻度に関しては, ほぼ毎日の回答者が最も多く, 目的に関しては, 通勤, 手段に関しては, 徒歩, 自転車の回答者が上位であった。

手書き地図に関して, ケヴィン・リンチの「都市のイメージ」で扱われる 5 つの要素, Node, Landmark, Path, Edge, District に分類し集計したところ, Landmark が住民にとって地域を捉える一番重要な要素であった。また, 要素のみを指摘したものは 94 件で要素と共に記述があるものは

75 件であった。記述を分類すると 75 件のうち, ポジティブが 16 件, ニュートラルが 31 件, ネガティブが 28 件と地域に関して想起されやすいものは日常生活の中で危険である, マイナスイメージを定着させるような要素が多く見られた。

次に八潮市内の好きな場所に関する分類を表 5.3 に示す。

表 5.3 好きな場所に関する分類

大分類	中分類/小分類	例	
経験	思い出	子供が小さいとき/通ってました/ボール遊びをした	
	日常性	物についた時からずっと/週に2回は利用	
説明	知識	犬瀬のしじまがあります/実績のある洋菓子店	
	存在	存在(設備)	おもちゃ屋/スカイター
		存在(人間)	おじちゃん方がいる
		存在(環境)	中川のキラキラとした水面
変化	変化(環境)	当時は田、畑ばかり/景観がまったく変わりました	
理由	見え方	美観	きれいで美しい/汚い
		眺望	見通しが良い/遠くまで見渡せる
	情緒	季節	四季を感じる
		圧迫	開放感がある/いい
		活気	活気あふれる町
		寒暖	ぬくもりを感じる
	心理的作用	明確	明るい感じ/なんか暗い
		安心	心が癒される/ホッとする/和む
		快適	快適/心地いい
		長閑	のどか/平和な所
自己の判断・評価	印象(身体的)	落ち着き	落ち着く
		向上	前向きになれる/心強い
	印象(視覚的)	感情	嬉しい/楽しい
		印象(視覚的)	眺めが良い/太陽の光が見えて飽きない
		印象(身体的)	広く感じられる
		雰囲気	雰囲気が良い
	文化・風土	接近	思いの場/仲良くなるきっかけ
		嗜好	羨高/素晴らしい
		地域性	八潮らしい/田舎らしい
		伝統	長い歴史をもつ
交流	地域の交流が盛っている		
利便性・利用価値	駅近で便利		
整備	対策してくれている/安全		

結果として好きな場所 10 個では, 中分類の「買い物」, 大切な場所 3 個では中分類の「自然」「運動」の回答が多かったことから「買い物」に関する場所は特に大切な場所として選ばれにくいことが示唆された。また, 八潮らしいと思う場所に関して, 好きな場所では見られなかった「工場」が挙げられた。いずれに関しても, 「神社・寺院」を含む「構造物」や「図書館」などを含む「教育・文化」の選好が少なく, 住民にとって, 八潮における伝統的な構造物や文化的な施設は印象が薄いことが読みとれる。さらに, 八潮らしい場所に関して, 現在では八潮駅に新市街地の形成が推進されているが, 「鉄道」の回答者は少なく, 前章 3.5 で記述されていたような中川に付随する原風景の曖昧化とは異なり, 中川付近の土地利用に関わらず「川・水路」は未だ住民に認識されやすい要素であることが伺える。

以上の各場所に関する理由についての分類を表 5.4 に示す。大切な場所 3 個に関しては, 小分類の「知識」の記述が多く, 次いで「思い出」, 「存在(人間)」, 「安心」, に関する記述が多かった。居住歴別に見てみると, 11 年以上のグループでは「思い出」や「知識」に関する記述が多いが, 0-11 年のグループでは小分類の「存在(人間)」や「安心」に関する記述が多く, 住民の交流の機会やそれに対する安堵感等が多く記述されていた。市内の施設や飲食店等より近所の住民とのつながりが伺える。また, 八潮らしい場所に関する記述では, 「思い出」は非常に少なく「利便性・利用価値」が最も高い。八潮らしい場所では住民の経験は少

ないにも関わらず漠然と皆が八潮らしいと感じていることが伺える。大切な場所と八潮らしい場所の理由を比較すると、大切な場所では「文化・風土」に関する記述がより少なく、八潮らしい場所では「利便性・利用価値」に関する記述がより多いことが明らかとなった。

表 5.4 好きな場所の理由に関する分類

大分類	中分類/小分類	例
経験	思い出	子供が小さいとき/通っていました/ボール遊びをした
	日常性	物心ついた時からずっと/週に2回は利用
説明	知識	大瀬のしほりがあります/実績のある洋菓子店
	存在	存在(設備) おもちゃ屋/スライダ 存在(人間) おじいちゃん方がいる 存在(環境) 中川のキラキラとした水面
	変化	変化(環境) 当時は田、畑ばかり/景観がまったく変わりました
	見え方	美観 まれい/美しい/汚い 眺望 見通しが良い/遠くまで見渡せる 季節 四季を感じる 圧迫 開放感がある/いい 活気 活気あふれる町 寒暖 ぬくもりを感じる 明確 明るく感じ/なんか暗い
理由	心理的作用	安心 心が癒される/ホッとする/和む 快適 快適/心地いい 長閑 のどか/平和な所 落ち着き 落ち着く 向上 前向きになれる/心強い 感情 嬉しい/楽しい
	自己の判断	印象(視覚的) 眺めが良い/太陽の光が見えて飽きない 印象(身体感覚的) 広く感じられる
	評価	雰囲気 雰囲気がいい 親近 近い/場/仲良くなるきっかけ 嗜好 最高/素晴らしい
	文化・風土	地域性 八潮らしい/田舎らしい 伝統 長い歴史をもつ 交流 地域の交流が残っている
	利便性・利用価値	駅近で便利
整備	対策してくれている/安全	

さらに、理由に関して、時の流れについて「季節」「時間帯」「時代」に分類し、集計している。各項目に関する件数を表 5.5 に示す。

表 5.5 時の流れに関する記述の各項目件数

	季節	時間帯	時代
好きな場所3個(79)	15	14	3
八潮らしい場所(67)	3	0	0
好きな場所3個グループ1(13)	0	5	1
好きな場所3個グループ2(28)	7	5	2
好きな場所3個グループ3(23)	7	4	0

大切な場所3個では、「季節」「時間帯」に関する単語を伴った記述が多く見られたが、八潮らしい場所については「思い出」や「日常」に関する記述が少ない為か、時の流れに関する記述は少なかった。大切な場所3個に関しては、居住歴0-10年のグループでは「季節」の記述が見られなかったが、10年以上のグループでは「季節」「時間帯」に関する記述も多く見られた。また表中のグループは居住歴によって分類され、グループ1は居住歴0-10年で11人、グループ2は居住歴11-20年で10人、グループ3は居住歴20年以上で12人である。

6. 研究のまとめ

全体を含めて、好きな場所として多くあげられていたのは飲食であり、次いで公園・広場であった。飲食に関してはカフェやファミレス、ケーキ屋など多様であったが、

公園・広場に関しては八潮駅前の広場が回答の多くを占めており、新規居住者が増加している中でコミュニティの場や種類が少なく、回答が偏っているように感じられた。時に大切な場所として挙げられていたのは「自然」「運動」に関する回答であり、特に大切な場所として選ばれにくいことが明らかとなった。また、居住歴グループ1では近所の方との交流を多く記述されているものもあり、人の存在自体が地域の選好場所に大きく関わっていた。好きな場所には「思い出」や「日常」など経験の記述が多く、八潮らしい場所については「利便性・利用価値」が著しく高かった。つまり、好きな場所では八潮特有の文化や風土との結びつきは弱く、八潮らしい場所では個人の経験や心理的作用との結びつきが弱いことが示唆された。地域の代表景観が見えづらい住工混合地域で、住民の選好場所や地域のアイデンティティを見出すためには住民が日常生活の中でつながれるような場所が多く存在することが最も重要であるといえる。

<参考文献>

- 黒澤武邦, 寺奥淳, 尹祥福, 中川義英: 埼玉県における首都圏整備計画の影響に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, 第31回, 1996
- トマス・ジューバーツ, 荻原敬 監訳, 「間にある都市」の思想-拡散する生活域のデザイン-, 水曜社, 2017年
- 森秀秀一郎, 荒井歩: 埼玉県八潮市における景観変遷と住民の景観認識に関する研究, ランドスケープ研究, 73巻, 5号, pp.755-758, 2010
- 吉村晶子: 原風景の生成に関する研究, 造園学会, ランドスケープ研究67(6), pp.731-736, 2004
- 尾野薫, 星野裕司, 増山晃太: 都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論, 土木学会論文集D1(景観・デザイン), Vol.71, No.1, pp.133-150, 2015
- 斎藤和夫, 石崎裕幸, 田村亨, 榎谷有三: 都市のイメージ構造と地域特性の関係に関する研究, 土木計画学研究論文集, No.14, 1997年
- 大石洋之, 村川三郎, 西名大作: 被験者の自由記述に基づく地域景観の選好特性に関する研究, 日本建築学会環境系論文集, No.599, p.135-142, 2006
- 加藤謙介: インタビュー調査をもとに近隣環境における高齢者の愛着場面に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol.78, No.687, pp.997-1002, 2013年
- 渡部陽介, 橋本真: 行為と距離の観点からみた農村地域居住者が地域アイデンティティとして認識する景観の特性, ランドスケープ研究, Vol.73, No.5, 2010年
- 添田信行, 佐々木葉: 多層地地図を用いた一般的な市街地における場所性の抽出方法, 土木計画学研究論文集, Vol.39, No.167, 2009年
- 上山輝, 土肥博至: 写真撮影法を用いた景観評価の基礎的構造に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, No.31, pp.595-600, 1996年
- 古賀啓章, 高明彦, 宗方孝, 小島隆矢, 平手小太郎, 安岡正人: キャプション評価法による市民参加型景観調査-都市景観の認知と評価の構造に関する研究 その1-, 日本都市計画学会学術研究論文集, No.517, pp.79-84, 1999年
- 上田裕文: 風景イメージスケッチ手法の構築に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集, No.44-3, 2009年
- 西村泰絵, 佐々木葉: 地域認識の把握手法に関する研究レビュー, 第51回土木計画学研究発表会, 2015年
- 赤木徹也, 鮎坂誠之: 認知語学的アプローチに基づく都市空間の概念化に関する基礎的研究-既成市街地の住居系地区を対象として-, 日本都市計画学会学術研究論文, 2012年
- 榎橋悠, 山田恭平, 中村秋香, 平尾盛史: 被災地における街の記憶の復元と共有手法に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol.79, No.699, pp.1129-1137, 2014年
- 八潮市立資料館, 八潮の歴史文化ナビ「れきナビ-やしお歴史事典」,